

特別支援学校と教育支援教室におけるゆかた着装体験が生徒の情緒に与える影響の比較

大矢幸江¹⁾, 薩本弥生²⁾

1: 昭和学院短期大学, 2: 横浜国立大学教育学部

The difference of Try-on Yukata class's effect on students' emotion between special support class and education support class

OYA Sachie¹⁾, SATSUMOTO Yayoi²⁾

1: Showa Gakuin Junior College 2: College of Education, Yokohama National University

1. 緒言

近年、特別支援学校及び小学校・中学校の特別支援学級や通級による指導の対象児童生徒は増加傾向（平成 29 年：41 万 7 千人と全児童生徒の約 4.2%を占め、平成 19 年比約 2 倍）¹⁾ にあり、児童生徒の自立活動の重要性とともに、充実した支援体制、多様な学びの場の整備等の課題が指摘されている²⁾。

特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向け、教育的ニーズを把握し、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行っている。平成 19 年 4 月から児童生徒に対応した適切な教育を行うため、学校教育法に位置づけられ、すべての学校において、障害のある幼児児童生徒の支援をさらに充実していくこととなった³⁾。生徒の資質・能力の育成や豊かな学習環境の充実も要請され、高等学校段階においては、自立と社会参加に向け一貫した教育支援を継続して行うことの重要性が指摘されている⁴⁾。また、クラスの仲間とのコミュニケーションなど対人関係が困難な生徒への自立活動として「人間関係の形成」の指導も行われている⁵⁾。しかし、高等学校における特別支援教育の現状は、体制としては整備されてきているものの、個別の指導や支援については小・中学校の取組みと比べ遅れていると指摘され、「知ること」「経験すること」や、実践に際して「自分は達成できる」「自分には能力がある」と自身を信じて行動に移せる力、すなわち自己効力感を高めることが必要であるとされる⁶⁾。また、学級内における生徒の関係性、人格の発達などに注目し、教育実践の現場から学ぶ、というスタイルの研究が進められることが期待されている⁷⁾。

一方、様々な要因で学校に登校できない小・中学生は、増加に歯止めがかからない状況にある。文部科学省が毎年公表する調査によると、平成 29 年度の不登校児童生徒数は、14 万 4031 人（前年度比 1 万 348 人増）と、統計開始以降、初めて 14 万人に達したと報告された⁸⁾。全児童生徒に占める不登校の割合は、小学校 0.54%（184 人に 1 人）、中学校 3.25%（30 人に 1 人）となり、過去最多を更新している⁹⁾。教育委員会では、不登校に関する支援等を行うために相談窓口や、「教育支援センター（適応指導教室）」（以下、教育支援センター）を設置して不登校児童生徒に対する通所指導を行っている¹⁰⁾。教育支援センターとは、「不登校児童生徒等に対する指導を行うために、学校以外の場所や学校の余裕教室等において、学校生活への復帰を支援するため、児童生徒の在籍校と連携をとりつつ、個別カウンセリング、集団での指導、教科指導等を組織的、計画的に行う組織」¹¹⁾ とされる。そこでの支援は、生徒への教科学習の指導に加え、自然体験や社会体験等を通じた体験活動、軽スポーツや調理実習などのグループ活動等、様々な活動が取り入れられている。教育支援センターの効果的な支援の在り方としては、学校との緊密な連携と本人への支援、家族への支援、それらの連携・協働が重要とされている¹²⁾。しかし、不登校児童生徒に関する研究は、フリースクールや教育支援

センターの実態調査研究や支援方法の改善に関する研究¹³⁾、教育支援センターの整備に関する研究^{14),15)}は見られるものの、教育支援センターにおける、生徒への心理的効果をめざした実践活動の研究は見受けられない。

これまで筆者らは、中学・高校の普通級において、ゆかた着装体験を含む授業の実践^{16)~20)}により、ゆかたの着装が生徒たちに着装による高揚感とともに、着物文化への興味関心を引き出す効果や、自分で着装することによって、生徒の自信の向上につながる効果を明らかにしている。また、教育支援教室においても、生徒の着物文化への興味関心や生徒同士の連帯感、自己肯定感を高める効果があることを明らかにした²¹⁾。そこで、特別支援学校の生徒を対象にして、ゆかた着装を体験させた上でワークを行う実践を通して、着物文化への興味・関心を高めるとともに、ありのままの自分を受け入れ自分の存在を肯定できる力、すなわち自己肯定感を高める等の心理的効果があるのではないかと仮説を立てた。本研究では、特別支援学校の高校生、教育支援センター内の教育支援教室に通級する生徒を対象に、ゆかたの着装体験とその後のワークを行い、実践の前後に生徒を対象としたアンケート調査と、教員への面接を実施することにより、生徒の着物文化に対する意識、連帯感や仲間意識、自己肯定感等の情緒にどのような影響を与えるか、また、校種による効果の違いがあるかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究内容・方法

2.1 特別支援学校、教育支援教室の概要と本実践の目標

Y 大学部附属特別支援学校は、「知的障害のある児童生徒に対して、一人ひとりの発達や障害の状態、特性に応じた教育を行い、心身の調和的発達を図るとともに、その可能性を最大限に伸ばし、自立と社会参加に必要な知識、技能及び態度を養うこと」を教育目標としている。本実践は、高等部3年生を対象に卒業に向けた「社会人セミナー」として、ゆかた着装を含む着物文化について学ぶ授業を実施した。「卒業後の自立した生活に向け、生活に関わる知識や技能を学習する一環として、ゆかたの着装体験等の実践を通じて着物文化に関わる知識と技能を学習する」が、学習目標である。

E 市教育委員会が管轄する教育支援センター内の教育支援教室は、様々な要因で学校に登校できない小・中学生が通級するために設置された教室である。本教室では、子どもたちが、安心して身をおける「居場所」としての意義を大切に考え、人とかかわる力を伸ばし、学ぼうとする意欲を高めながら、学校復帰や将来の社会的自立につながるエネルギーを蓄えられるように支援を行なっている。生徒たちの主な通級理由は、「人を信じられなくなり、自分にも自信がなくなって、人との関係をうまくつくれなくなった状態」である。生徒には、小集団の中で様々な体験活動を通してコミュニケーション力を養い、自己肯定感を向上させて、今後の進路（高校進学）に繋がるような働きかけを行っている。その活動の一環として、本実践ではゆかた着装体験とその後ゆかたを着たままで納涼体験活動を行った。「ゆかた着装体験を通して、日本独自の夏の季節感を感じ、日本文化を知ること、コミュニケーション力を養い、連帯感、仲間意識を高めること」が、本実践の目標である。

2.2 実践活動の詳細

2017年2月にY大学附属特別支援学校、高等部3年生10人、同年7月にE市教育委員会が管轄する教育支援教室に通級する中学生5人を対象に、ゆかた着装およびその後のワーク活動を行った。対象者やおもな活動内容等を表1に示す。

表1 実施年月・対象者と人数、おもな活動内容

年月、時間	対象者	男子	女子	おもな活動内容と流れ				
2017年2月 約2時間	Y 大学附属特別支援学校 高等部 (3年生)	6人	4人	着物やゆかたの紹介	着つけ示範	各自で着装	福笑い	たたみ方実習
2017年7月 約4時間	E 市教育支援教室 通級している中学生	2人	3人				納涼会(かき氷作り, ヨーヨー釣り, 射的など)	

特別支援学校（以下、特別支援と表記）では、2時間続き（1時間：50分）の授業を行った。まず講義形式で「着物やゆかたの紹介」を聞いた後、ゆかたの着つけの示範を見てから、各自で着つけを行った。グループに分かれ、ゆかたを着装したまま福笑いを行うことで、ゆかたの着装感を味わせた。最後にゆかたのたたみ方示範を見た後に、各自でゆかたを畳ませた（図1～図4）。

教育支援教室（以下、教育支援と表記）では、午後の活動をすべて本実践に費やした（約4時間）。講義は行わず、ゆかたの着装の示範を見てから、各自に自分で着装させた。その後の納涼会には十分な時間を設けた。最後のゆかたのたたみ方の示範と実践は、特別支援と同様に行った。本教室に通級する生徒の多くは、机にじっと座り話を聞くことが苦手で、集中力が続かない特性を持っている。講義を組み入れた過去の実践経験を踏まえ、生徒には講義よりも実践活動に多くの時間をかけたほうが効果的であると判断されたため、講義なしの実践となった。人と関わることが苦手で、多くの人が集まる縁日等への参加を避ける傾向がある生徒たちは、これまで納涼会等の経験が少ない。そこで、本実践を通して、夏のイベントの一つである納涼会を体験させることとした（図5～図8）。



図1 着つけ示範（特別支援）



図2 各自で着装（特別支援）



図3 福笑いの様子1（特別支援）



図4 福笑いの様子2（特別支援）



図5 ゆかた選び（教育支援）



図6 着つけの示範（教育支援）



図7 各自で着装（教育支援：男子）



図8 納涼会の様子（教育支援）

2.3 調査方法

両校とも、実践の前後に生徒を対象としたアンケート調査と、実践後の教員への面接調査を実施した。教育支援のスタッフ教員には、実践後にアンケート調査も行った。生徒対象の事前のアンケート調査では、「ゆかたの着つけについて」4項目、「ゆかたへの興味・関心について」4項目、「着物への興味・関心について」4項目、「衣服への興味・関心について」6項目を、それぞれ(1.はい、2.いいえ)の2択で回答させた(図9)。実践後のアンケート調査では、ゆかたを着てみて「楽しかった点」「難しかった点」を自由記述で回答させ、「ゆかたの着つけ理解について」9項目、「ゆかたを着た時の気持ちについて」8項目、「ゆかたや着物についての考え」8項目について、それぞれ(1.はい、2.いいえ)の2択で回答させた(図12)。教員対象の調査では、生徒の日常の様子との比較から、本活動による生徒の情緒面での変容や本活動の意義等について、考えや感じたことを半構造化インタビューで聞き取った。教育支援のスタッフ教員にはアンケート調査も合わせて行い、「ゆかた着身体験の意義」「全体の感想」を自由記述で回答させた。

2.4 アンケート調査およびインタビュー調査の分析方法

生徒へのアンケート質問項目中、選択式回答は単純集計にて全体的傾向を把握した。解析には、SPSS Statistics20を使用し、有意水準は、 $p < .05$ 、 $p < .01$ 、 $p < .001$ で有意検定した。自由記述回答の分析については、SPSS Text Analytics for Surveys 4.0.1を用い、記述内容を感性分析によってカテゴリに分類して出現回数を数値化した。さらに、抽出したカテゴリから出現パターンの似通った語、すなわち共起する程度が強いカテゴリを線で結び、カテゴリ間の関係性の強さから本活動体験の効果を検討した。教員への半構造化インタビュー結果と自由記述の回答については、観点ごとに集

計結果をまとめた。

3. 結果および考察

3.1 実践前の生徒の校種による意識の比較

授業前の生徒へのアンケート調査、2択(1.はい、2.いいえ)で回答した結果について、「1.はい」の回答割合を算出し、校種による差の検定 (t 検定) を行った。その結果を図9に示す。

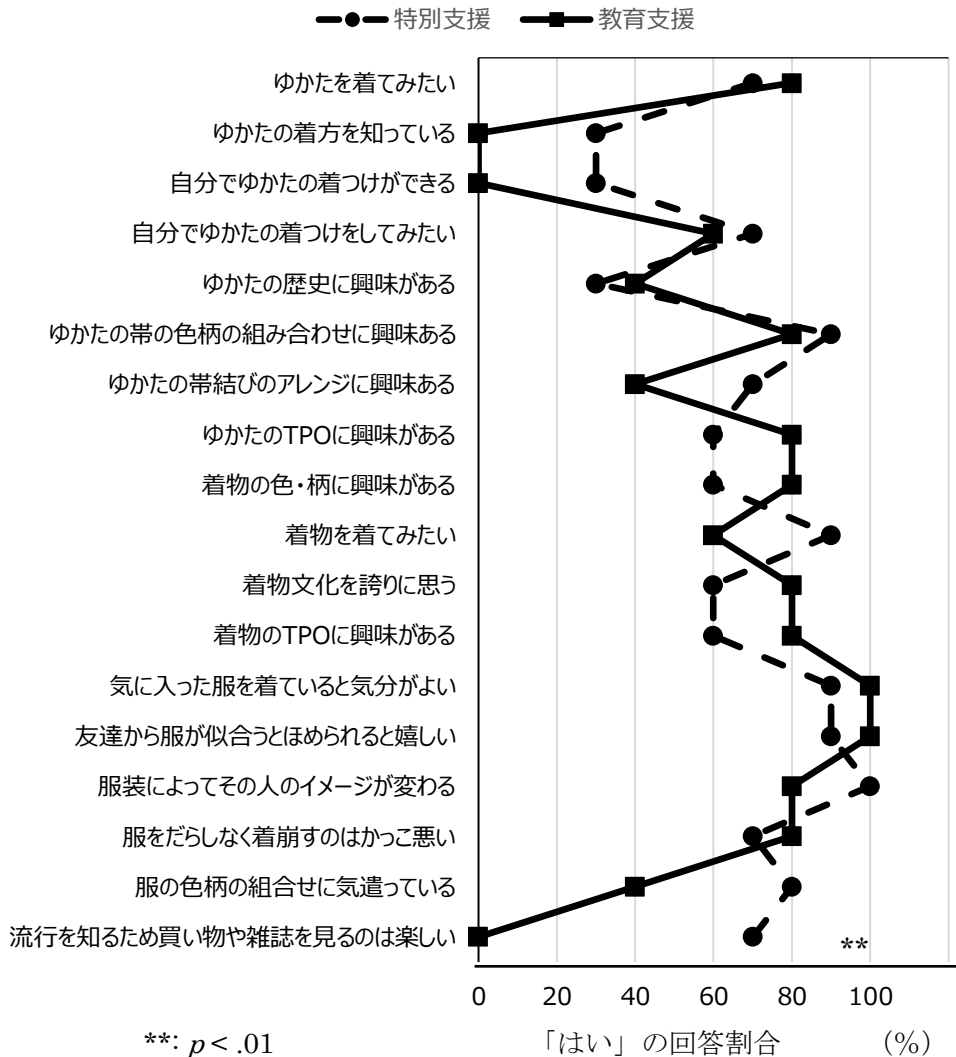


図9 授業前、生徒のゆかたや服への興味関心

授業前のゆかた着装への意欲を聞いた「ゆかたを着てみたい」は、70~80%と、どちらの校種も関心が高い。「ゆかたの着方を知っている」「自分でゆかたの着つけができる」は教育支援で0%、特別支援は30%と、両校種とも低い。服への関心に関しては、「気に入った服を着ていると気分がよい」「友達から服が似合うとほめられると嬉しい」は、90~100%となり、服への関心は高いと言える。 t 検定による比較からは、「流行を知るため買い物や雑誌を見るのは楽しい」のみ有意差 ($p < 0.01$) が見られ、特別支援で70%、教育支援が0%であった。その他のゆかた及び着物に関する興味関心を問う項目は、校種による有意差はなく、どちらも60%前後で「はい」と回答していた。

以上から、両校種の共通点は以下となる。生徒はゆかたの着装経験は少なく、ゆかたの着装を楽しみにしている。そして、服への興味関心は高いものの、自分でゆかたの着つけは出来ず、着方も知らない。ゆかたや着物に対する関心はあるので、出来ない、知らないのは、これまで触れる機会が少なかったためと考えられる。相違点は有意差のあった項目である。ファッションには興味があるものの人混みが苦手な教育支援の生徒は、買い物に行きたがらない。特別支援の生徒は、買い物が楽しいと感じているのに対し、教育支援の生徒は楽しいと感じていないということが示された。

3.2 実践後の生徒の自由記述結果

授業後の生徒へのアンケート調査のうち、自由記述の内容をカテゴリに分類し、出現回数を数値化した。生徒全体の傾向を捉えるために、両校の自由記述を合わせ、テキストマイニングによって解析を行った。カテゴリに分類した自由記述の回答を、共起する、すなわち同時に出現するカテゴリを線で結んで可視化グラフにしたものが「カテゴリ Web」である。出現回数が多いと、●が大きくなり、出現パターンが似ているカテゴリは共起回数が多く、グラフ上で結ばれた線が太くなる。グラフ化した「カテゴリ Web」にて「楽しかった点」(図 10)、「難しかった点」(図 11)の結果を示す。

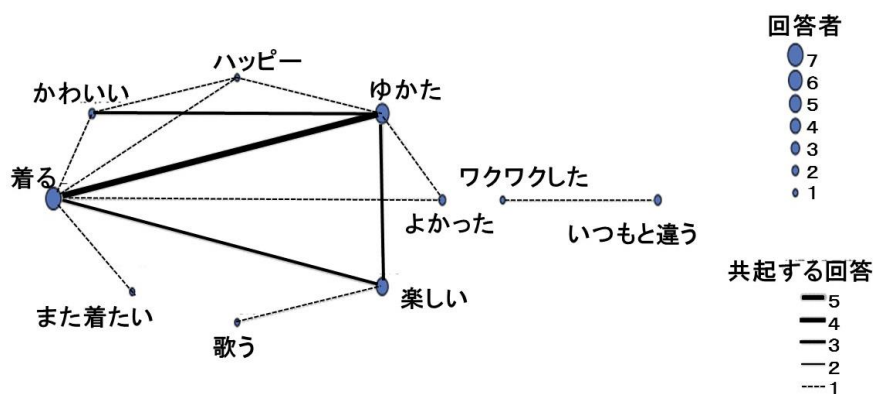


図 10 自由記述「楽しかった点」

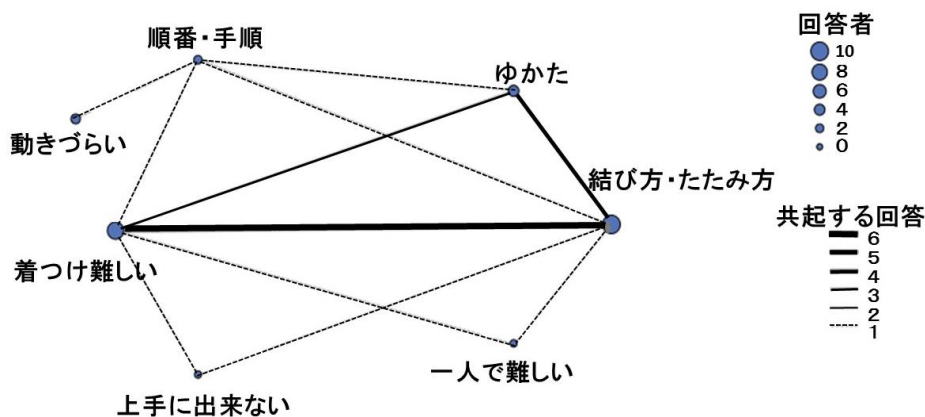


図 11 自由記述「難しかった点」

「楽しかった点」を見ると、「ゆかた」と「着る」の出現回数が多く、共起する回数も多くなっている。「ゆかた」や「着る」から、「楽しい」「よかった」「また着たい」などの共起も見られる。また、生徒は「いつもと違う」雰囲気を感じ、「ワクワクした」高揚感も味わっていた。一方の「楽しかった点」の自由記述からは、「着つけ難しい」と「結び方・たたみ方」の出現回数が多く、共起している回数も多い。「着つけ難しい」と「結び方・たたみ方」からは、「一人で難しい」や「順番・手順」の共起も見られる。ゆかたを一人で着ることは難しい、と感じているようだ。

生徒は、自由記述で多くの内容を記載することは難しかったが、強く印象に残ったことは記入されていた。ゆかたを着て、生徒同士、お互いにいつもと違う一面を見つけ、楽しい時間を過ごすことができた。「ワクワクした」という気持ちの高まりから、「ゆかたをまた着たい」と思うようになった。着装に関しては、着つけ、帯結び、たたみ方のいずれにも難しさを感じ、本実践の時間だけで、一人で着られるようになるのは難しいと感じていた。これらの結果は、これまで行ってきた中学校や高校の実践結果と同様である。本実践は、ゆかたの着装は難しいと感じつつも、それ以上に、ゆかたを着ることの楽しさと、気持ちの高揚をもたらす経験となっていた。ゆかた着装そのものの効果と言える。

3.3 生徒の実践後の意識の変化と校種による比較

授業後の生徒へのアンケート調査の2択(1.はい、2.いいえ)で回答した結果について、「1.はい」の回答割合を算出し、校種による差の検定(t 検定)を行った。その結果を図12に示す。

着装後に「はい」が80~100%と高い割合の回答が得られた項目は、「ゆかたを着ていつもと違う気持ちになった」(特別:100, 教育:100)(単位:%省略)、「納涼会,福笑いは楽しい」(特別:100, 教育:100)、「ゆかたが似合うと褒められると嬉しい」(特別:90, 教育:100)、「着物は日本の伝統文化の一つだ」(特別:90, 教育:100)、「ゆかたに関心持てた」(特別:100, 教育:80)、「またゆかたを着てみたい」(特別:100, 教育:80)、と6項目あった。自由記述の回答と同じ傾向を示しており、ゆかたの着装とその後のワークが楽しく、着物に対しても伝統文化としての価値を感じる体験になったことが伺える。一方、「帯の結び方わかった」「着つけが上手にできた」「一人でゆかたを着ることできた」等のゆかた着装の技能習得については、20~100%とばらつきがあり、自信を持って「できる」と言えるほど技能の習得は出来ていないようだ。「着物文化を誇りに思う」「ゆかたのTPOに興味がある」「着物についてもっと知りたい」等、ゆかた及び着物に関する興味関心は、授業後に80~90%となり、授業前(60%前後)より高い値を示していた。両校種ともゆかた着装によって、着物文化への興味関心の喚起に効果があったと言える。

校種間による t 検定の結果、有意差を示したものは、「ゆかたを着て立ち居振る舞いに変化する」(特別:90, 教育:20, $p < 0.01$)、「ゆかたを着ると自分の印象が良く変わる」(特別:90, 教育:40, $p < 0.05$)、「腰ひもの結び方わかった」(特別:40, 教育:100, $p < 0.05$)、「ゆかたを着ると歩きにくい」(特別:40, 教育:100, $p < 0.05$)の4件であった。特別支援では、ゆかたを着装して立ち居振る舞いが変わり、自分の印象が良くなるという、態度や意識の変化を感じているのに対し、教育支援は有意に低い。逆に、腰ひもの結び方の理解や、ゆかたを着たときの歩きにくさの感覚は、教育支援が有意に高く、特別支援は低かった。特別支援の生徒は、ゆかたを着てワークを行った際の高揚感が大きく、歩きにくさは気にならなかったようだ。教育支援の生徒は、着装技能への理解力があり、歩きにくさを体感している一方で、立ち居振る舞いや自身の印象の変化といった心理面での変化は小さかった。これは、心を閉ざしがちな傾向を持つ生徒の特性の影響から、高揚感を感じつつも心

を開ききれていないのではないかと考えられた。技能の理解力は特別支援より高いものの、気持ちは相対的に冷めていて、心の開放に時間がかかる生徒たちであると言えた。

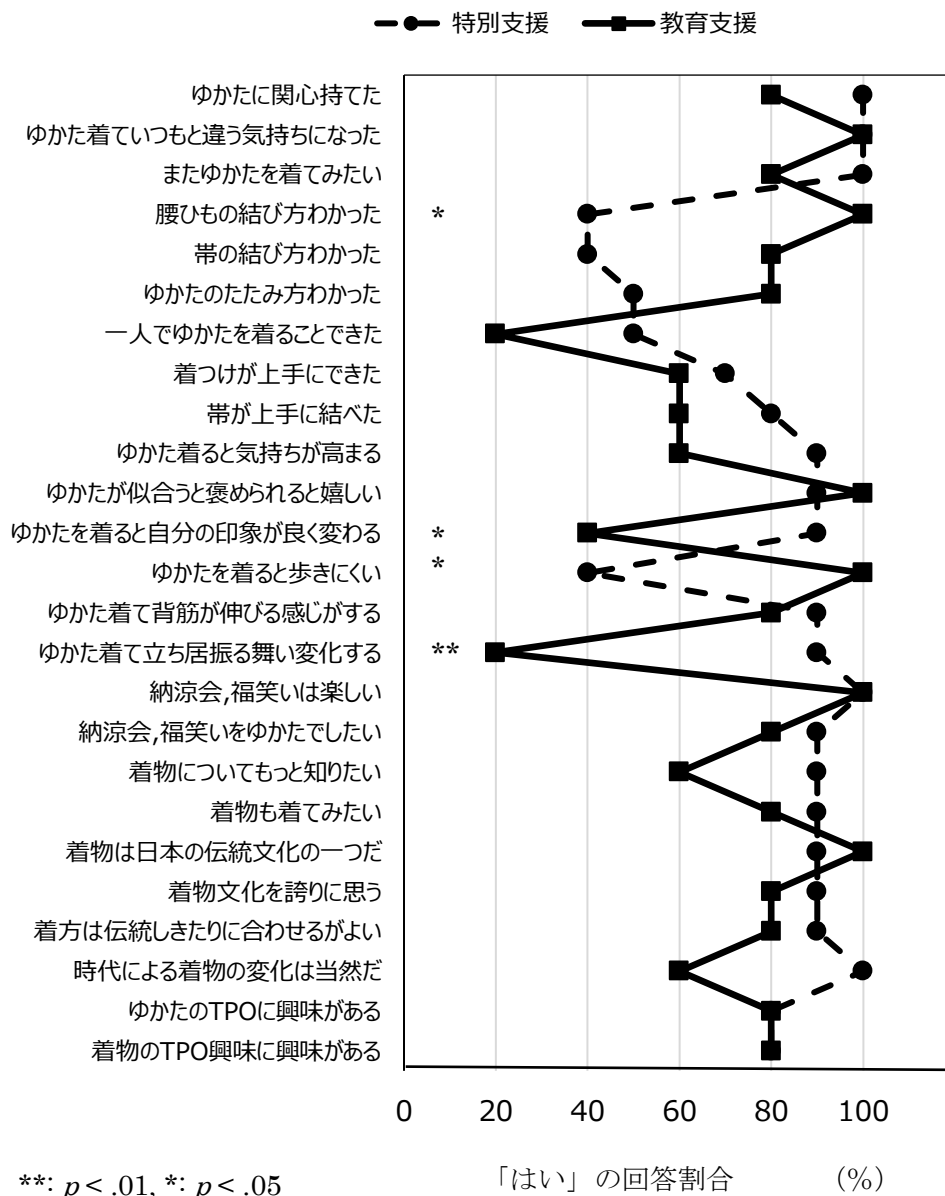


図 12 授業後、生徒の着物文化に関する意識

3.4 教員への面接と自由記述の結果

本実践後に実施した教員への面接調査や教育支援のスタッフ教員へのアンケートを、「体験の意義」「着物文化への意識」「仲間意識・自己肯定感」の3つの観点から回答内容を集計した。その結果を表2に示す。

まず、両校の教員ともに体験そのものの意義が大きいと感じている。生徒は、いつもは見せたことのない生き生きとした表情で楽しそうに活動していたことや、生徒同士の会話が多く見られたことなど、体験活動の重要性を改めて実感したと述べていた。また、自分で着装することの意義について

も述べられた。難しくとも援助は最小限にとどめ、自分で着装を完成させることによって、喜びや満足感、自信につながっていくことが期待されていた。楽しい体験が、着物に対する肯定的感情に繋がりと、さらに、着物文化に良い印象を持ったことから、興味関心を高めることが出来たと感じていた。着装後のワークでは、生徒が協力して福笑いを完成させる体験が、仲間意識を高めることにつながった。納涼会では、生徒同士のコミュニケーションが活発になり、一体感が生まれ、楽しい時間を共有したことから生徒の情緒に良い影響が得られた、と述べられていた。教員自身も、教室で見せる日常の姿とは違う生徒の様子に驚き、生徒に体験させて良かった、と充実感を感じていた。

表2 授業後の教員への面接

	特別支援	教育支援
体験の意義	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆかたを見て、触れて、着る体験が重要である ・体験そのものが学習の入り口となる ・七五三を思い出し、また着てみたいと思う ・高揚感が高まり、生徒の表情がとても良い 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆかたを着たことない生徒が、いつもと違う自分を感じていた ・また、着物に触れたい、着てみたいと感じる機会となった ・和服のよさを知った
着物文化への意識	<ul style="list-style-type: none"> ・おしゃれに興味やこだわりのある生徒は、着物への関心を高める機会となり、着物文化への興味につながった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆかたの魅力に気づき、着物文化に興味を持つ機会となった ・学習意欲が高まった ・伝統文化への興味も引き出され、興味の幅が広がった
仲間意識・自己肯定感	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒のレベルの差が大きいため、自分で着られない生徒もいたが、福笑いの体験時には、ワークを引っ張り、リードする役の生徒が現れた。協力して福笑いを完成させていた 	<ul style="list-style-type: none"> ・人混みが苦手な生徒が納涼会で仲間と触れ合い、生徒同士の一体感が生まれ、仲間意識が芽生えた ・自分で着ることによって、自分にもできるという自信がついた

4. 結論

本研究では、特別支援学校の高校生、教育支援センター内の教育支援教室に通級する中学生を対象に、ゆかたの着装体験とその後のワークを行い、実践の前後に生徒を対象としたアンケート調査と、教員への面接を実施することにより、生徒の着物文化に対する意識、連帯感や仲間意識、自己肯定感等の情緒にどのような影響を与えるか、また、校種による効果の違いがあるかを明らかにすることを目的とした。

その結果、両校の生徒とも、ゆかた着装とワークの実践により、着物を身近に感じる機会になり、「ゆかたをまた着てみたい」など良いイメージを抱き、着物文化への興味関心を高めた。ゆかたの着装技能理解については、特別支援学校よりも教育支援教室の生徒に効果が見られたが、自分一人で着装することは難しかった。しかし、教員は、自分で着装できるように挑戦すること、そのことが生徒の自信や自己肯定感に繋がりと、意義が大きいと感じていた。着装後のワークでは、生徒同士が協力して課題に取り組み、コミュニケーション力向上への効果が見られ、仲間意識の芽生えも得られた。2校を比較すると、特別支援の生徒たちは素直に喜びを表現しているのに対して、もともと人間関係で難しさを抱えた教育支援教室の生徒は、特別支援学校の生徒に比べると心を閉ざしがちであり、喜びを表現したり、心を開放したりすることに時間がかかると考えられた。

本実践により、ゆかた着装という体験を伴う実践が、普通級の生徒への効果に留まらず、特別支援学校や教育支援教室の生徒にとっても効果があることが示唆された。特に、本実践の対象校では、知識や技能面よりも情緒面での効果が大きく現れると考えられた。これまで、ゆかた着装は家庭科教育の中での実践が多く行われてきたが、他の行事等さまざまな場面での応用が期待できる。

謝辞

本研究の授業実践に当たり、多くのお力添えとご協力いただいた横浜国立大学附属特別支援学校高等部教員の北村淳子氏、海老名市教育支援センター教員の水野鏡子氏に心から感謝申し上げます。

また、TAとして協力いただいた薩本研究室のメンバー、および、調査に協力いただいた生徒たちに心から感謝する。

【参考・引用文献】

- 1) 文部科学省 特別支援教育について 特別支援教育資料（平成 29 年度）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1406456.htm
- 2) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課. 特別支援教育行政の現状と課題 平成 30 年 6 月
http://zent2014.xsrv.jp/htdocs/?action=common_download_main&upload_id=399
- 3) 文部科学省. 特別支援教育の推進について 平成 19 年 4 月
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07050101.htm
- 4) 高等学校ワーキング・グループ. 高等学校における特別支援教育の推進について 平成 21 年 8 月
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/054/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2009/11/05/1283675_3.pdf
- 5) 文部科学省. 高等学校における特別支援教育の現状と課題について 平成 27 年 11 月
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/gyouji/_icsFiles/afieldfile/2015/11/20/1364697_04_1.pdf
- 6) 小木曾 誉, 都築 繁幸. 高等学校の特別支援教育の研究動向に関する一考察. 愛知教育大学紀要. 2016, **12**, 165-172
- 7) 浜谷 直人. 通常学級における特別支援教育の研究成果と課題. 教育心理学年報. 2012, **51(0)**, 85-94
- 8) 文部科学省. 平成 29 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 平成 30 年 10 月 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm
- 9) e-Stat 政府統計の総合窓口 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 平成 30 年 10 月 25 日
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400304&iroha=12>
- 10) 文部科学省. 不登校への対応について
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121505/004.htm
- 11) 文部科学省. 教育支援センター（適応指導教室）に関する実態調査 平成 27 年 8 月
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/_icsFiles/afieldfile/2017/11/06/1397806_1.pdf

- 12) 藤田絵理子, 則定百合子. 不登校支援の在り方に関する再考. 和歌山大学教職大学院紀要. 学校教育実践研究. 2019, **3**, 143-151
- 13) 高賢一. 適応指導教室における子どもの支援方法の改善策に関する研究. 金沢星稜大学論集. 2006, **40(1)**, 17-25
- 14) 樋口くみ子. 教育支援センター(適応指導教室)の「整備」政策をめぐる課題と展望. 〈教育と社会〉研究. 2016, **26**, 23-34
- 15) 樋口くみ子. 「教育支援センター(適応指導教室)」の四類型. 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要. 2013, **2**, 50-59
- 16) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子. 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発—「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信—. 服飾文化共同研究最終報告書. 2012, 2-119
- 17) 薩本弥生, 川端博子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 扇澤美千子, 堀内かおる, 井上裕光, 葛川幸恵. ゆかたの着装体験を含む教育プログラム開発をめざした中学校技術・家庭科での授業実践. 日本家庭科教育学会誌. 2013, **56(1)**, 14-22
- 18) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子. きもの文化の伝承をめざしたゆかたの着装を含む教育プログラム開発のための中学校技術・家庭科での授業実践—教育学部の大学生アシスタントティーチャー(AT)を活用した試みから—. 横浜国立大学 教育デザイン研究. 2013, **4**, 35-44
- 19) 川端博子, 薩本弥生, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 扇澤美千子, 堀内かおる, 井上裕光. ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み. 日本家庭科教育学会誌. 2013, **56(2)**, 78-89
- 20) 大矢幸江, 薩本弥生. ゆかた着装授業と着装後ワークがきもの文化への興味関心に及ぼす効果. 日本家政学会誌. 2018, **69(1)**, 1-17
- 21) 大矢 幸江, 薩本 弥生, 水野 鏡子. 教育支援教室におけるゆかた着装体験が生徒の情緒に及ぼす影響. 横浜国立大学教育学部紀要. I, 教育科学. 2019, **2**, 59-71